

Kami ma da  
上 万 田 遺 跡

山国川一恒久橋架替工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1993

大分県教育委員会



上万田遺跡の位置と調査範囲

## 序

大分県教育委員会では平成4年度に建設省九州地方建設局大分工事事務所の委託を受け、山国川—恒久橋架替工事に伴う上万田遺跡の調査を実施しました。この報告書は、その発掘調査の記録です。今回の発掘調査では、弥生時代後期の溝や古墳時代の石棺墓などが発見され、学術的に貴重な成果を収めることができました。

本書が、多くの学術研究者及び県民の皆様にも、改めてこの地域に生きた先人たちの営みを振り返り、また将来に守り伝えるべき歴史遺産の一つとして埋蔵文化財を御理解いただく契機となれば幸いです。

最後に、調査に御協力いただきました関係各位及び地元の方々に対し厚くお礼を申し上げます。

平成5年3月

大分県教育委員会

教育長 宮本高志

## 例 言

1. 本書は、平成4年度（1992年度）に発掘調査を実施した山国川一恒久橋架替工事に伴う上万田遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、建設省九州地方建設局大分工事事務所の委託事業として大分県教育委員会が実施した。
3. 本書の編集・執筆は、吉田寛が行った。

## 目 次

I. 調査に至る経過と既往の調査	1
II. 発掘調査の成果	5
III. まとめ	20

## I. 調査に至る経過と既往の調査

山国川は、大分県と福岡県の県境を流れる一級河川である。その水源は耶馬溪山麓部に発し、河口は中津港を経て、豊前海へ注ぐ。

山国川河口より南約5.5kmの地点に、大分県中津市高瀬・万田地区と福岡県築上郡唐原地区を結ぶ「恒久橋」が架橋されている。恒久橋は地元中津市の篤志久恒貞雄氏（故人）が中心となって昭和12年（1937）に建設されたもので、氏の名字の「久恒」を反転し、恒久橋と命名されたものであるという。

1990年代になり、恒久橋が老朽化したのに加えて橋に取り付く県道中津－唐原線の交通量が増加したため、建設省大分工事事務所と大分県土木事務所は橋の架替と県道の拡幅を計画した。それによると、大分県側の工事は建設省が橋の架替工事と県道南西側（約120m）の拡幅工事を管轄し、県土木事務所が残りの県道北東側（約100m）の拡幅工事を管轄することになった。

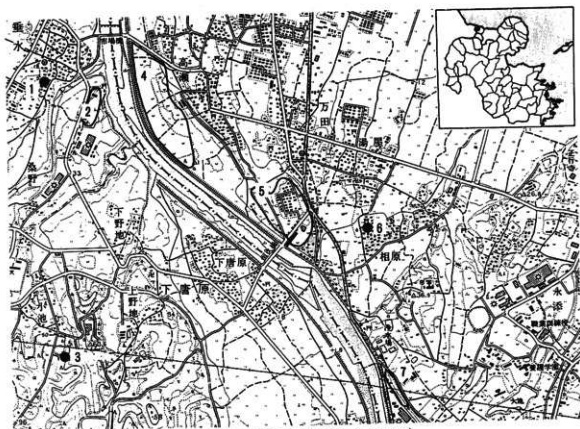


FIG. 1 上万田遺跡の位置 (S=1/25,000)

1. 垂水庵寺
2. 中桑野遺跡
3. 穴ヶ葉山古墳
4. 高瀬遺跡
5. 上万田遺跡
6. 相原庵寺
7. 上ノ原横穴墓群

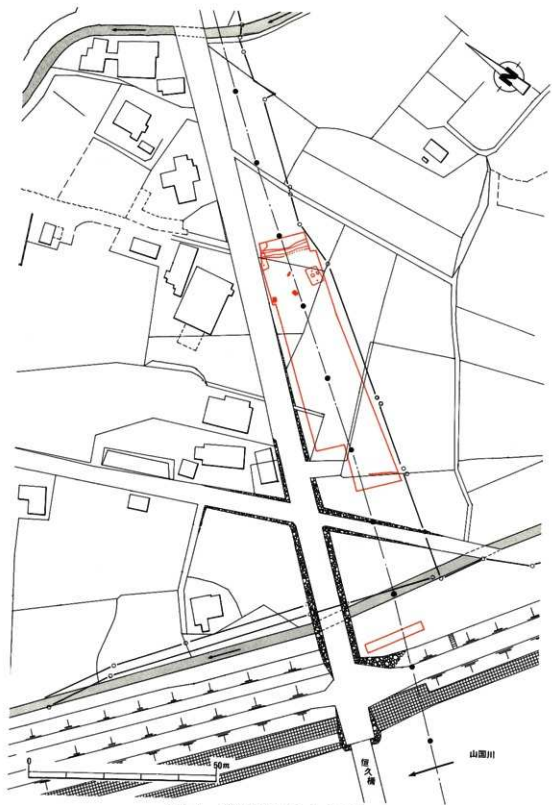


FIG. 2 周辺地形図 (S=1/1,000)

1991年10月、建設省大分工事事務所より建設省管轄部分の埋蔵文化財の有無に関する照会があり、これを受けて大分県教育庁文化課では当該地点が周知遺跡である「上万田遺跡」の範囲に含まれることから発掘調査が必要と判断し、県文化課埋蔵文化財第一係が調査を担当することとなった。現地での発掘調査は1992年5月下旬から7月下旬までの約二ヶ月間行った。調査地点は大分県中津市大字高瀬字根道に当たる。

調査はまず重機を搬入して建設省工事管轄部分3,300㎡のうち埋蔵文化財の存在が予想される約1,000㎡の表

土剥ぎを行った。その結果、表土剥ぎを行った大部分は礫層が見え隠れしており、遺構の存在が認められなかったが、調査区東端部において住居跡2・土坑1・土坑裏1・石棺墓2・溝2等の遺構を確認した。その後、遺構を検出した約350㎡について精査を行い、調査を終了した。

なお大分県土木事務所管轄地点も、来年度発掘調査を行う予定である。

調査組織は以下の通り。

調査委員 秋葉 正嗣 (県文化課長) 衛藤 伸一 (県文化課課長補佐)

調査主任 清水 宗昭 (県文化課主幹兼埋蔵文化財第一係長)

調査員 坂本 嘉弘 (県文化課主査) 西 哲弘 (同主査)

吉田 寛 (同 主事 調査担当)

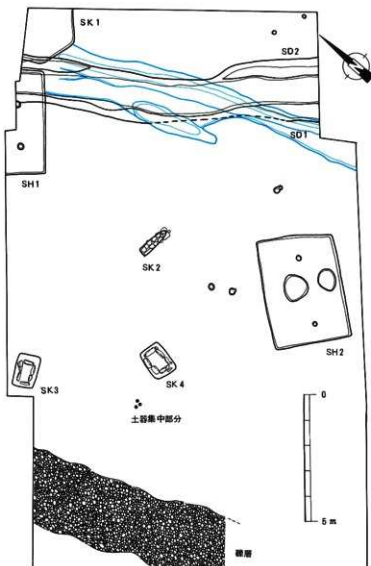


FIG. 3 調査区遺構集中区 (S=1/150)

作業員 長谷川昌孝・宮本徹・村本正敬・寺川堅・松垣潤太郎・中野光夫、相良秀子

上記の他、松山均（元中津市鶴居公民館館長）・小池史哲（福岡県教育委員会）・栗焼憲児（中津市教育委員会）・植田由美（三光村教育委員会）などの視察と助言を得た。

さて、ここで上万田遺跡の既往の調査について触れておきたい。

上万田遺跡は、山国川が形成する自然堤防上に立地する遺跡である。遺物の散布する範囲は大分県中津市大字上万田・上万田を中心とし、大字高瀬・三口の一部にまでおよぶ。本遺跡付近に土器片などの遺物が相当量散布していることは、地元の人々を中心にかなり古くから知られていた。しかし、遺跡の存在を強烈に印象づけたのは、昭和45年（1970）中津市大字上万田字川原田付近に計画された県営上万田団地の造成の際であった。当時は大分県教育委員会、中津市教育委員会とも埋蔵文化財に対する体制が万全でなく、造成に先立つ事前調査はもちろん、工事が開始され実際に遺構・遺物が出土し始めても行政側からは本格的な調査は行われなかった。そのような中で、中津南高等学校郷土研究会の高校生や歴史の関心を持つ地元民が中心となり、工事と併行して遺物の採集や石棺の写真撮影などの調査が行われた。その後、遺物の大部分は中津南高等学校郷土研究会に保管され、昭和47年（1972）3月には遺跡の簡単な見取図や土器の実測図などが掲載された報告書<sup>1)</sup>も刊行された。工事の際に出土した遺物は縄文土器から歴史時代の各時代におよび、上万田遺跡が当地方における大規模な複合遺跡であったことを示している<sup>2)</sup>。以上のように、上万田遺跡の中心部は大きく破壊を受けたが、当時を記憶する人々の話や周辺状況から、この地点も完全に破壊し尽くされたわけではなく、今後とも再開発の際には発掘調査の対象となり得る。また今回の恒久橋架替工事に伴う調査地点のように、周辺地域の開発にも埋蔵文化財に関する注意を十分に払う必要があろう。

なお、昭和45年の調査時に出土した石棺3基は中津南高等学校校庭に移築復元されており、また出土遺物は中津南高等学校から平成4年（1992）8月に開館した中津市歴史民俗資料館に移されて保管されている。

註 1) 大分県中津南高等学校郷土研究会『上万田遺跡発掘調査報告書』（中津市教育委員会 1972年）

2) 註1)文献以外にも、以下の文献に上万田遺跡の出土遺物が紹介されている。

北九州市埋蔵文化財調査会「高島遺跡」（『古文化談義』第3集所収 1976年） 31頁

宮本工・村上久和・城土誠「山国川下流域における縄文時代後・晩期の遺跡」（『九州考古学』第59号 1984年）

村上久和「大分県中津地域出土の瓦器について」（『古文化談義』第14集 1984年）



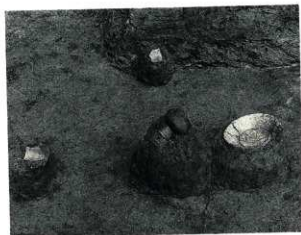
## II. 発掘調査の成果

今回の発掘調査で得られた遺構・遺物について、以下に紹介を行う。

SH1 (Fig. 4) 一辺約4mを測る竪穴住居跡である。調査区の制約によって全体の三分の一強を調査し得たのみである。主柱穴は4本であると推定されるが、調査区内では2本を検出している。埋土中には多量の炭化物や焼

土が見られ、この遺構が火災住居であることを示している。住居跡の南辺中央付近から、床面よりやや浮いた状態で古墳時代中期の土師器が出土している。住居跡東辺付近は後述するSD1・SD2と切り合っており、構築順序はSD2→SH1→SD1となる。住居跡の時期は、出土遺物から5世紀中頃に比定される。

出土遺物 (Fig. 5) 1は高坏坏部である。口縁部がゆるやかに外反する器形を呈する。



SH1 遺物出土状況



SH1 遺物出土状況



SH1 完掘状況

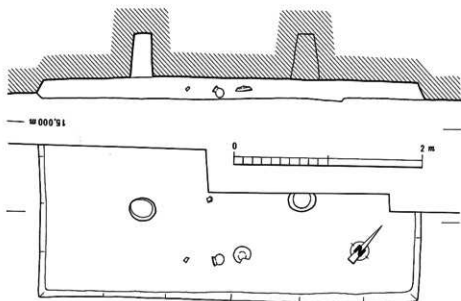


FIG. 4 SH1実測図

外面の一部には刷毛目が認められる。2は小型丸底の鉢である。胴部外面の一部に刷毛目が認められる。1・2とも器形の特徴から5世紀中頃に比定されるものである。

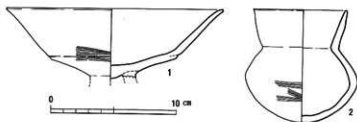
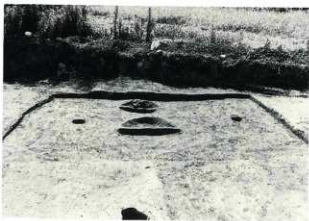


FIG. 5 SH1出土遺物

SH2 (Fig. 6) 長辺4.4m、短辺3.0mを測る竪穴住居である。上面は大きく削平を受けていると思われる、検出面からの深さは約20cmである。主柱穴は2本である。床面中央に直径1m、深さ10cmを測る皿状の土坑が存在し、中央部に焼土塊が認められることから、炉穴であると思われる。また炉穴の南東側にも長径80cm、短径35cm、深さ10cmの堀り込みを持つ土坑があり、埋土中から炭化物や土器片などが検出された。住居跡の時期は、出土遺物から弥生時代後期後半に比定される。



SH2 完掘状況

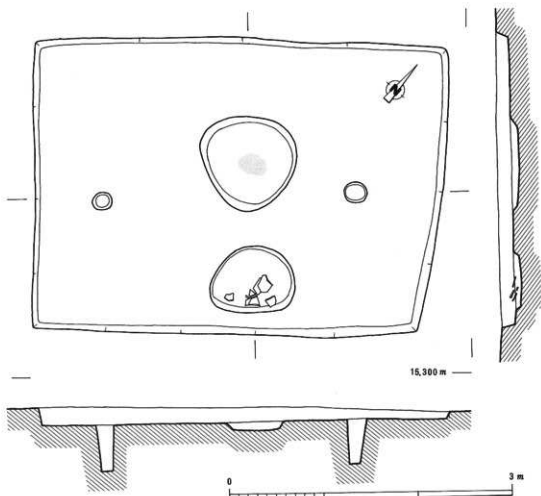


FIG. 6 SH 2 実測図 (トーンは焼土塊)

出土遺物 (Fig. 7) 1は「く」の字状を呈す甕の口縁部である。2は甕の胴部突帯で、外面に刷毛目が認められる。3は底部で、レンズ底状を呈する。外面には刷毛目が認められる。4は鉢で、内外面に刷毛目調整が施されている。SH 2の出土遺物は小片が多く、図示した以外は実測に耐えない小破片であるが、遺物の中には叩きのある破片が認められず、その大半は弥生後期末までは下らない後半代に比定できると思われる。ただし2は中期後半代の甕の破片である可能性が高く、流れ込みであろう。

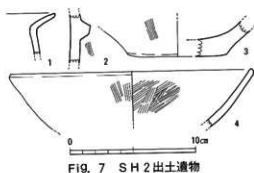
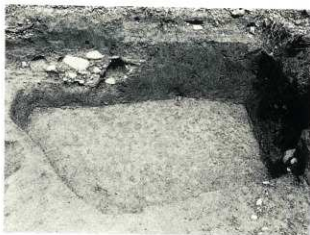


FIG. 7 SH 2 出土遺物

SK 1 (Fig. 8) 調査区北隅で検出した不整形の土坑である。検出面からの深さは約30cmを測る。調査区の制限から、遺構の性格は不明である。埋土中より土師器片、床面より完形の砥石が検出されているが、時期を示す良好な出土遺物がなく、詳細な時期決定は不可能である。SD 1・SD 2と切り合い関係を有しており、構築順序はSD 2→SK 1→SD 1となる。



SK 1 完掘状況

出土遺物 (Fig. 9) 図示したものは砂岩質の石材を素材とした砥石である。長さ18.5cm、最大幅3.4cmを測る。仕上げ砥と思われ、4面が使用されている。

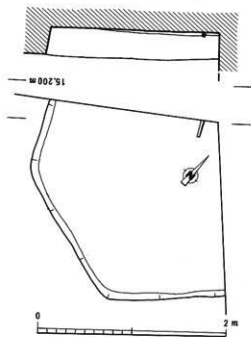


FIG. 8 SK 1 実測図

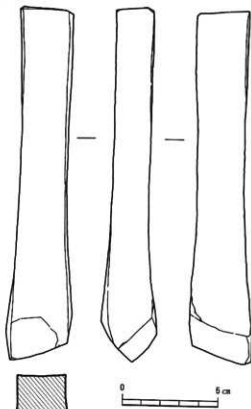


FIG. 9 SK 1 出土遺物

SK 2 (Fig.10) 長さ1.3m、最大幅0.4m、深さ12cmを測る小児用の土坑墓である。墓坑上面で13個の川原石が検出され、腐食した木蓋を押さえていたものと思われる。頭位方向は西になると思われ、その部分の床面にはわずかな凹みが認められる。墓坑内からの出土遺物はないが、土坑北東側で先端を東に向けた鉄鍬が出土している。

出土遺物 (Fig.11) 残存長11cm、残存部の最大幅1.7cm、厚み0.4cmを測る鉄鍬である。先端部を欠損するが、基部には木質が残存する。詳細な時期決定は困難であるが、古墳時代以降のものであろう。

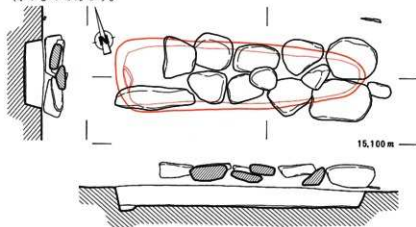


FIG.10 SK 2 実測図



FIG.11 SK 2 出土遺物



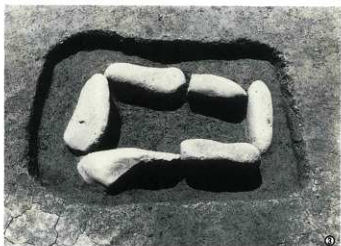
SK 2 完掘状況



SK 2 検出状況

SK 3 (Fig. 12)

川原石を使用した小児用の石棺墓である。石棺の内法は長さ70cm、最大幅35cm、掘方は長さ1.28m、最大幅0.9m、深さ15cmを測る。頭位方向は東になると思われる、床面には拳大よりやや小さめの石を敷いて死床としている。注目すべきことは、石棺の上面に2段から3段川原石を鉢巻状に積み上げ、墓標ないしは標石的な役割を持たせていることにある。この標石的な積石は鉢巻き状あるいは持ち送り状に積み上げられるため、中央付近に略円形の空隙ができ、憶測をたくましくすれば、その部位に木柱などの有機質の墓標的なものが設置されていたと解釈することも不可能ではない。写真や図面を参照願いたい、ただし積石の断ち割り調査や土層観察が十分でなく、その点に関しては断定できない。積石



- ① SK 3 積石検出状況
- ② SK 3 石棺検出状況
- ③ SK 3 敷石除去後

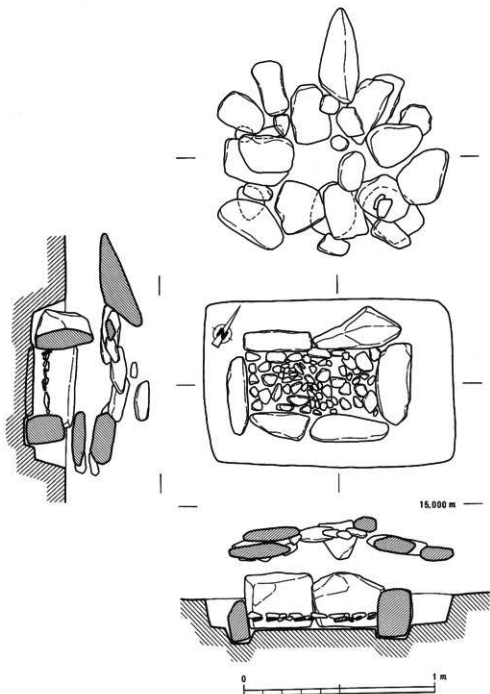


FIG.12 SK 3実測図

をすべて除去すると、石蓋は検出されず、石棺の四周を囲う側壁、妻石、木口石が現れる。積石最下段に使用されている石の底面と側壁などには若干のレベル差があり、本来この部分に木蓋が存在していた可能性が高いと考える。出土遺物はなく、時期の特定は困難であるが、後述の類似した構造をもつSK 4とはほぼ同時期に比定されるものであろう。

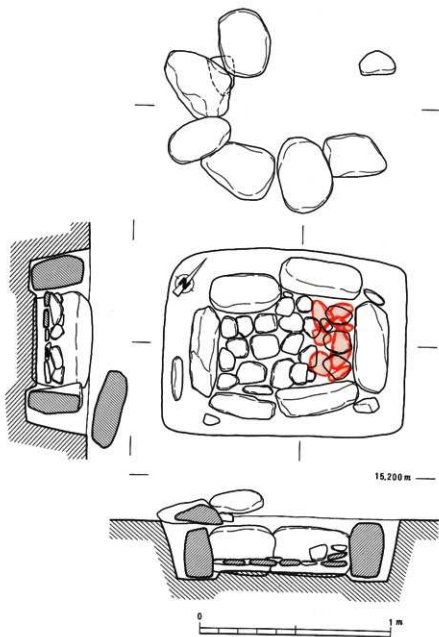
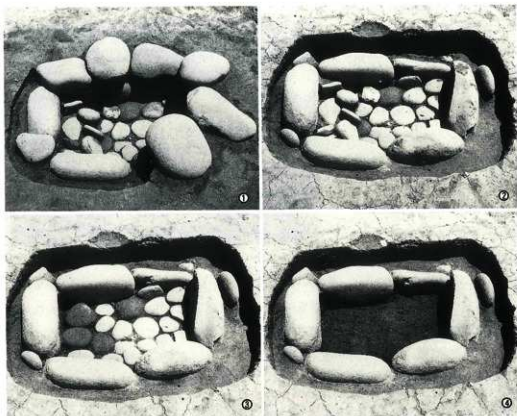


FIG.13 SK 4 実測図

SK 4 (Fig.13) 川原石を使用した小児用の石棺墓である。石棺の内法は長さ72cm、最大幅48cm、掘方は長さ1.28m、最大幅0.98m、深さ30cmを測る。頭位方向は北東になると思われ、床面には拳大の石を敷いて死床とするとともに、頭位部分にはさらにもう1段川原石を敷いて枕石としている。石棺掘方と側壁・木口石の間にもいくつかの川原石を埋め込み、裏込めとしている。石棺の上には頭大の川原石7個が鉢巻状に設置されている。これはSK 3





① SK 4 検出状況 ② 石棺完掘状況 ③ 枕石除去後 ④ 敷石除去後

で見られたような積石の最下段に相当するもので、本来2段から3段程度積み上げられていたものであろうと想像される。この石棺でもやはり石蓋は検出されず、積石底面と側壁などの間にわずかにレベル差が認められることから、この部位に木蓋が存在していた可能性が高い。石棺内からの出土遺物はないが、石棺掘方の南西約1.5mの地点から須恵器、土師器が少量検出されている。これらの遺物が石棺の構築年代を示すものとすれば、SK 4は6世紀前半代に比定されるであろう。

**出土遺物 (Fig.14)** 1は須恵器坏蓋で、復元口径14.0cm、器高5.3cmを測る。器形の特徴から陶邑福年MT15ないしTK10型式に属し、6世紀前半代に比定される。2は土師器坏の口縁部で、端部が短く外反気味に立ち上がるものである。この種の土師器は5世紀末から6世紀前半代にかけて存在するもので、1と共伴すると考えても差し支えないものである。これらの出土遺物は、SK 4と関連する可能性が高いと考える。



FIG.14 SK 4 周辺出土遺物  
(出土地点はFIG. 3 参照)

### SD 1・SD 2 (Fig. 15)

調査区北東部で検出した溝である。両者はほぼ同じ場所に重複して検出されており、SD 1は古墳時代以降、SD 2は弥生時代後期後半の所産となる。前述のように、この二つの溝は古墳時代中期の住居跡SH 1や土坑SK 1と切り合い関係を有しており、構築順序は古い順にSD 2→SH 1・SK 1→SD 1となる。



SD 1埋土中に混入した石棺石材(蓋石)

SD 1は検出部分の長さ12m、最大幅約2.3m、最小幅約1.2m、深さ約1.3mを測る不整形の溝である。埋土の大部分は川原礫で構成されており、特に溝北半部には検出面のレベル以上に礫が積み上げられ、塚状をなしている部分 (Fig. 15で礫を図化している部分) も認められる。埋土を構成する礫の中には、原位置を遊離した石棺石材も存在する。調査区の制限もあり、溝の性格は不明であるが、暗渠的なものであろうか。遺構の構築時期を示す良好な遺物は出土していない。

SD 2は検出部分の長さ約11.5m、幅約1.7～2.5m、深さ約1.5mを測る溝である。溝は検出部分の中央付近で緩やかに屈曲しており、この部位を境に断面形を異にする。すなわちFig. 15に示したA-A'断面では逆台形、B-B'では二段掘りの略Y字型を呈する。SD 2の土層埋土は大きく三層群に分類される (Fig. 16)。第1層群ではA-A'断面2・3層、B-B'断面2～4層が対応する自然堆積層である。上面には風化土層を形成しており、自然営為によって溝が埋没してゆく典型的なプロセスがみられる。第2層群はA-A'断面4層、B-B'断面5層が対応する。ほぼ水平に堆積する青灰白色粘質土層で、溝のほぼ全域に認められ、わずかに細砂粒を含む部位も認められる。第2層群の下位に堆積するものが第3層群 (A-A'断面5～7層、B-B'断面6～8層が対応) で、暗褐色粘質土と地山ブロックとの互層をなす。これらは溝の掘削土が再堆積したものと考えられ、部位によっては東側、すなわち集落内側からの流入土が認められる所がある。第3層群は溝の掘削土を利用した土塁状の構築物の形成土が再堆積したものと考えられるわけであるが、上記の流入土の状況から土塁が東側集落内側に存在したと断定することにはやや躊躇を覚える。調査区の制限もあり、この点については保留しておきたい。埋土中の第2層群や第3層群下位に若干の細砂粒の混入を認める部分もあるが、土層全般の検討からは流水の痕跡が認められず、SD 2は機能時にはいわゆる「空堀」状を呈していたものと考えられる。溝の機能としては、周辺の遺構の状況から、集落を区画す

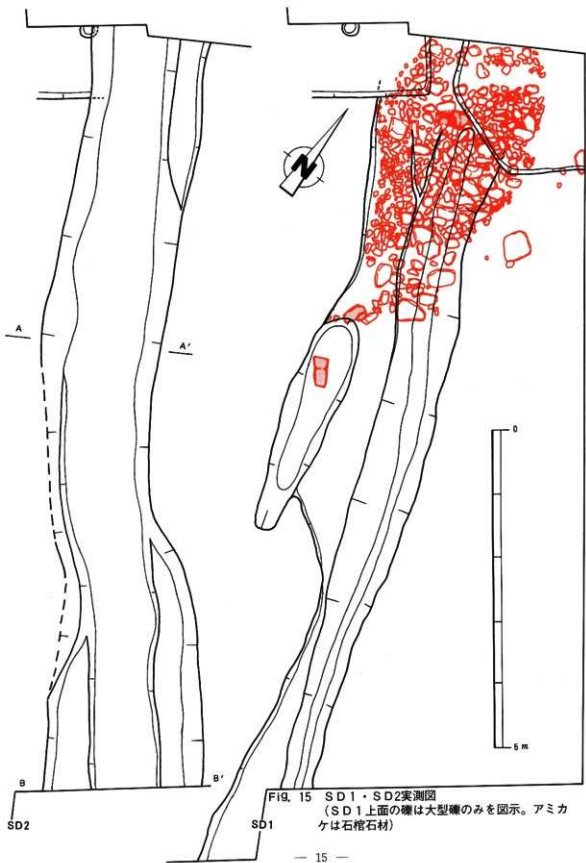
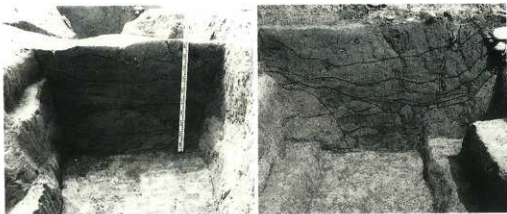


Fig. 15 SD1・SD2実測図  
 (SD1上面の礫は大型礫のみを图示。アミカケは石棺石材)



- ① SD1 検出状況 多量の川原礫により埋土が形成されている。  
 ② SD1 完掘状況 川原礫を取り除いた状態。不整形断面を呈する溝が検出された。  
 ③ SD2 完掘状況 (南から) ④ SD2 完掘状況 (北から)



SD 2 土層堆積状況

るためのものである可能性が高い。今後の調査によっては、SD 2 が「環溝」あるいは「条溝」といった、当該時期に特有の集落景観を示す重要な遺構になることも十分に考えられよう。出土遺物は土器片のみであるが、全て埋土中に含まれており、床面密着で検出できたものはない。出土地点も第1層群に含まれるものが多く、第2・3層群からは土器小片が少量検出されているに過ぎない。出土土器には弥生時代後期後半の特徴を示すものが多く、胴部破片の中には叩き技法を有するものは1片も認められない。従って、SD 2 の構築時期は弥生時代終末までは下らない、後期後半の時間幅の中に求められる。

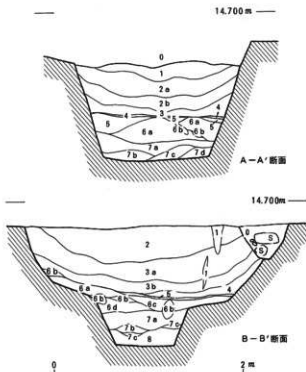


FIG. 16 SD 2 土層堆積状況

- |  |   |
|--|---|
| <p>A-A'断面</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>0. 川原礫を多量に含む堆積層 (SD 1 層土)</li> <li>1. 黄褐色粘質土 (SD 1 構築に伴う整地土)</li> <li>2. 暗褐色粘質土</li> <li>3. 褐色粘質土</li> <li>4. 青灰白色粘質土 (B-B'断面5層に対応)</li> <li>5. 薄褐色粘質土</li> <li>6a. 暗黄褐色粘質土</li> <li>6b. 地山ブロック土</li> <li>7. 暗黄褐色粘質土と地山ブロックの互層</li> </ol> | <p>B-B'断面</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>0. 川原礫と多量に含む堆積層 (SD 1 層土)</li> <li>1. 樹痕</li> <li>2. 明褐色粘質土</li> <li>3. 暗褐色粘質土</li> <li>4. 褐色粘質土</li> <li>5. 青灰白色粘質土 (A-A'断面4層に対応)</li> <li>6. 薄褐色粘質土と地山ブロック土の互層 (6bは地山ブロック土)</li> <li>7. 暗黄褐色粘質土と地山ブロック土の互層</li> <li>8. 黄褐色粘質土</li> </ol> |
|--|---|

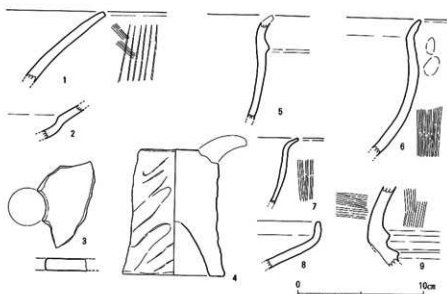


FIG.17 SD1・SD2出土遺物（1～3 SD1 4～9 SD2）

出土遺物 (Fig.17) 1・2は弥生土器の高坏である。相互に接合はしないが、同一個体あるいは同一型式になるものと思われる。口縁部が湾曲しながら大きく伸びる器形を呈する。外面には刷毛目調整とともに縦方向の暗文を有する。3は土師質の胎土を有する土器片で、復元径3cmの有孔部を持つものである。小破片のため器形・時期ともに不明であるが、きわめて緻密な胎土を有するもので、古代以降のものであろうか。4は弥生土器の支脚である。欠損しているが、有角部を持つものと思われ、外面には指ナア痕が顕著に残っている。5～7は弥生土器の甕。5は口縁下に一条の突帯を有する。風化のため、器壁が磨滅している。6は「く」の字状口縁を有するもので、胴部上半に指頭痕、下半に刷毛目調整が認められる。7も「く」の字状口縁を有するもので、胴部に刷毛目調整を施す。いずれも小破片で、口径等を復元できない。8は弥生土器の高坏である。坏部の破片で、口縁端部が内傾しながらわずかに立ち上がる器形を呈する。9は弥生土器の壺の頸部破片である。頸部に多条突帯を巡らすものと思われるが、残存部では2条の三角突帯が認められる。口縁部内外面に刷毛目調整を施す。以上は1～3がSD1、4～9がSD2からの出土遺物である。1・2は本来SD2に帰属するものと考えられる。3は新しい傾向を示すものであるが、小破片であるため、たとえこの遺物の製作時期が特定できたとしても、それが直ちにSD1の構築年代とストレートに結び付くものではないと考える。4～8は弥生時代終末までは下らない、後期後半代の時間幅の中に比定できるものであり、SD2と直接関連する遺物である。9は弥生時代中期末から後期前半代の特徴を示すものであり、4～8と比較するとやや古い様相を示す遺物である。この時期の遺物は今回の調査ではきわめて少ないため、现阶段ではSD2埋土中に混入したものと考えておきたい。

**礫層出土遺物 (Fig. 18)** SD 1 の西側約15m 付近に礫層が広がっている。これよりさらに西側には古い時代の遺構の検出はなく、上万田遺跡の西限に当たる。この礫層から土器片が少量出土しており、以下に紹介する。

図示したものは須恵器 3 点である。1・2 は蓋で、同一個体あるいは同一型式に位置づけられるものである。天井部には偏平なツマミを有し、口縁端部はかえりを消失して短く立ち上がる形態を呈する。飛鳥V期併行のもので、7世紀末から8世紀初頭に比定される。3 は坏身で、口縁端部のかえりが低く立ち上がるものである。残存部には回転ヘラ削りは認められず、底部はヘラ切り未調整となる可能性が高い。陶邑編年TK 209型式新段階からTK 217型式古段階に属するもので、7世紀前半代に比定される。

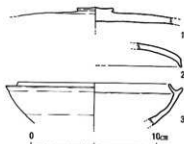


FIG. 18 礫層出土遺物

**縄文土器 (Fig. 19)** 以下に紹介する遺物は、表土中あるいは遺構埋土中に混入した縄文土器である。周辺に包含層もしくは当該遺物の時期に比定される遺構の存在が予測されるが、今回の調査では検出できていない。

1 は口縁部付近の破片と思われ、外面に1条の突帯、内面に刺突文を有するものである。内外面ともナデによって仕上げられている。小破片で型式名を同定できないが、晩期中葉以降のものであろうか。2 は浅鉢の胴部で、後期後半に比定される磨消縄文系三万田式土器の破片である。残存部には4本の沈線が認められ、最上段に磨消縄文を施している。内外面とも条痕を施した後にナデ仕上げされている。3 は晩期後半に比定される深鉢の胴部破片である。屈曲部には突帯が認められず、内外面に条痕が施されている。4 も晩期後半の深鉢の胴部で、外面に一条の刻目突帯が認められる。やはり内外面に条痕を施す。5 も晩期後半の深鉢の胴部で、外面には直接刻みが施されている。外面はナデ仕上げ、内面には条痕文が残存している。

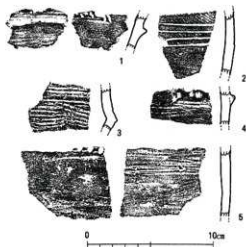


FIG. 19 縄文土器

(1・2 SD 2 3・4 SD 1 5 表土中)

以上1・2はSD 2、3・4はSD 1、5は表土中よりの出土である。

### Ⅲ. まとめ

以下、今回の調査によって判明したいくつかの問題について指摘しておきたい。

#### (1) SD 2 について—弥生時代後期の溝— (pp.14—18参照)

調査区北東部において、弥生時代後期後半の溝SD 2 が検出された。調査成果を略述すれば、以下の通りである。

- ① 検出部分の長さ約11.5m、幅約1.7～2.5m、深さ約1.5m。断面形は部位によって異なるが、逆台形もしくは略Y字型を呈する。
- ② 検出部分のほぼ中央でわずかに屈曲する。集落中心部は今回は未調査であるが、溝からみて東側になるものと思われる。
- ③ 溝の流入土の状況から、東側すなわち集落内側に土塁状の構築物が存在した可能性があるが、調査区の制限により断定できない。
- ④ 将来の調査で、SD 2 は「環溝」あるいは「条溝」といった当該時期に特有の集落景観を示す重要な遺構となる可能性が高い。
- ⑤ 遺構の存続時期の大半は、弥生時代後期後半代に求められる。

周辺地形の現況を参考にするとしても、今回の調査が道路幅の範囲に限られることから、現段階ではSD 2 の展開を予測することはかなり困難である。ただSD 2 西側には住居跡の検出が1基に留まることや溝の屈曲する方向、あるいは1970年（昭和45年）の調査地点が溝の東側約120mの地点に位置することなどから、弥生時代後期の上万田遺跡の集落景観を大まかには想像できよう（Fig. 20参照）。1970年の調査地点からは弥生時代後期の土器が大量に採集されていることや甕棺、石棺などの埋葬遺構も検出されており、この地点が上万田遺跡の中心部の一部であると思われる。また溝の東側約5mの地点で検出された弥生時代後期の住居跡SH 2 もSD 1 の存続幅の中に収まり、ほぼ同時期に存在していたものと思われる。そうすると規模の違いこそあれ、溝の内外に住居跡が存在していた可能性が高くなり、集落構造のあり方も問題にされなければならない。今後、SD 2 の追跡や居住遺構の広がり、埋葬遺構との関連など問題にすべき課題は多い。将来の調査に期待したい。

#### (2) SK 3・SK 4 について—川原石を使用した小児用石棺墓— (pp.10—13参照)

SK 3・SK 4 は川原石を使用した小児用石棺墓である。これらはやや特異な構造を有しており、両者に共通する特徴を列挙すると以下の通りである。

- ① 側壁・妻石・木口石ともに川原石を使用した小児用石棺墓である。
- ② 石棺底面に川原石による敷石を有する。また枕石を持つものもある。
- ③ 石蓋を持たず、木蓋を有していた可能性が高い。
- ④ 石棺上面には川原石を2～3段鉢巻状に積み上げ、標石とする。



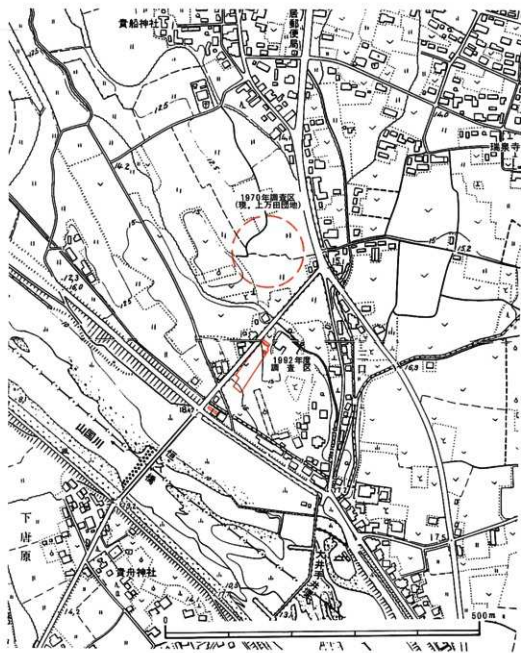


FIG. 20 上万田遺跡調査区位置図  
(1992年度調査区にはSD2・SH2を投影している。)

⑤ 構築時期は6世紀前半代に比定される可能性が大きい。

今回検出された石棺墓については、④の特徴が特に注目される。類例の探索が不十分であるが、このような標石的な積石を持つ墳墓は、当地域周辺には非常に少ないものと思われる。数

少ない類例の中で、報告されたものとしては大分県宇佐市別府遺跡D地点地下式石室<sup>註1)</sup>があげられる(Fig. 21)。別府遺跡例も出土遺物やその規模からみて、SK 3やSK 4とほぼ同時期の小児墓と思われるが、下部構造が土坑墓であることが異なる。しかし上部の積石は2～3段鉢巻状に積み上げられており、この部分の共通項は非常に特徴的である。今後の類例の蓄積が待たれる。

さて今回の調査地点では、古墳時代の小児墓が3基近接した地点で検出されている点が注目される。将来の調査で、今回の調査地点付近でも大人用の墓が検出される可能性は残るが、とりあえず

は当該地点が古墳時代後期においては墓域であったことが指摘される。また1975年の調査地点でも、6世紀前半代の土器類が大量に採集されており、この地点には住居跡などの生活遺構が存在した可能性が高い。古墳時代後期に関しても、1975年の調査地点と今回の調査地点とはやはり有機的な関連があったものと思われ、将来の調査で遺跡の構造に踏み込んだ検討がなされることが期待される。

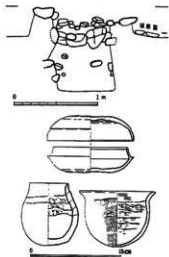


FIG. 21 別府遺跡D地点地下式石室と出土遺物（『宇佐市史』より）

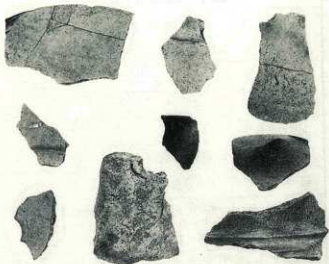
以上、今回の調査成果から得られた問題点のいくつかを指摘した。今回の調査では遺構を検出できた面積はわずかであり、出土遺物の総量も少なかった。しかし、検出された遺構・遺物の内容は縄文・弥生・古墳の各時代にわたり、上万田遺跡が当地域における大規模な複合遺跡であることを傍証することとなった。また遺構が分布する範囲を押さえたことで、上万田遺跡の東端の一部を限定できた意義は大きい。来年度も、今回の調査区より東側、すなわち溝SD 2より内側部分の調査が予定されており、この地点の調査成果も大いに期待される。

今回の調査でもその一端が明らかになったわけであるが、上万田遺跡は当地域の各時代において拠点的な性格を有する重要な遺跡となる可能性が高い。しかしその細部については、まだまだ資料不足の感をぬぐいきれない現状にある。今後の調査・研究が期待される。

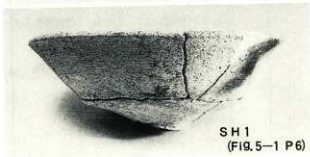
註1) 小田富士雄「古墳時代-15・別府遺跡D地点地下式石室-」（『宇佐市史』上巻 pp166-168）



SH 1  
(FIG. 5-2 P 6)



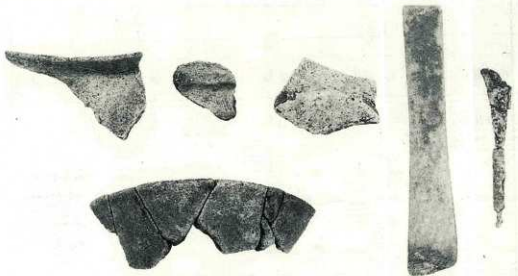
SD 1 · SD 2  
(FIG. 17 P 18)



SH 1  
(FIG. 5-1 P 6)



SK 3 周辺  
(FIG. 14 P 13)



SH 2  
(FIG. 7 P 7)

SK 1  
(FIG. 9 P 8)

SK 2  
(FIG. 11  
P 9)

上万田遺跡主要出土遺物

フリガナ	カミマダイセキ							
書名	上万田遺跡							
副書名	山国川-恒久橋架替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	吉田 寛							
編集機関	大分県教育委員会							
所在地	〒870 大分県大分市府内町3丁目10番1号							
発行年月日	西暦 1993年3月31日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
カミマ 上万田	カミマダイセキ 中津市大字 高瀬字根道					19920520   19920730	1,000	橋架替工事に伴う 道路拡幅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上万田		弥生	溝 1基 住居跡 1基	砥石		墓のうち2基は川原石を使用した石棺墓。 上部に標石あり。		
		古墳	墓 3基 住居跡 1基					
		不明	土坑 1基 溝 1基					

## 上万田遺跡

山国川一恒久橋架替工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1993. 3. 31

発 行 大分県教育委員会  
(〒870 大分市府内町3丁目10番1号)

印 刷 株式会社インタープリント  
(〒870 大分市大字津守563番地の7)